

# 学ぶ意欲を高め学力の向上を図る

奈良教育大学 重松 敬一

## 1. はじめに

平成23年度には全国学力・学習状況調査も第5回を迎えるところであったが、東日本大震災の影響で、全国規模での実施は見送られた。奈良県では、児童生徒の学習状況等が引き続き調査された。結果の概要は別に報告されるので詳細は避けるが、主なものは次のようであった。

「国語、算数・数学の勉強は好きですか」という質問について、肯定的に答えた児童生徒の割合は、小学校の算数で昨年度より増加したものの、それ以外は昨年度を下回っていた。

このような結果を踏まえて、授業改善や学力向上への取組を真摯に行い、子どもたちに学ぶ喜びをもたらす努力をすることが引き続き大切とされた。

実際、奈良県の子どもたちの学びの実態をしっかりと押さえ、今後の奈良県での学習指導改善のための質的な課題を踏まえ、奈良県で学ぶよさを実感してもらえよう学習指導環境を実現することが一層望まれているように思う。

そこで、質的な学習指導環境の改善を図るための手がかりを、子どもの学習意欲の向上ということに焦点を置きながら引き続き考えてみたい。

特に、今年度は、「学力向上実践研究推進協議会」で組織的な検討を行ってきた。具体的な課題は、四つの実践推進校（御所市立名柄小学校、御所市立大正小学校、生駒市立生駒南第二小学校、田原本町立北小学校）を設けて、実践的検討を行った。

## 2. 昨年までの提案を振り返る

### (1) 奈良県の現状について

奈良県の現状では、この4年間ではほぼ変わらない課題がある。

- ① 表現の仕方に注意して読み、内容について理解することに課題がある。
- ② 日常的な事象について、筋道を立てて考え、数学的に表現することに課題がある。
- ③ 学習は大切だと思っている児童生徒の割合に比べて、学習が好きだと思っている児童生徒の割合が低い。
- ④ 学校のきまりを守っている児童生徒の割合が低いなど、規範意識に課題がある。
- ⑤ 全国学力・学習状況調査の調査結果が、学校の取組に十分に生かされていない。

### (2) 学ぶ意欲を高めるための学習指導について

まず、基礎基本ができていないからといって練習だけを繰り返すのではなく、「無理や」「できないわ」といった否定的な気持ちから「ちょっとやってみるわ」と思わせることが大切になる。その後、以下に示す三つの学力層に応じた学習指導を考える必要がある。

A層：学習習慣の定着や習得が中心の学びの層

B層：自分なりの学びの方法を知ることが必要な層

C層：自分なりに学びのチャレンジができる層

A層では小さな納得の連続、B層では大きな納得の学び、C層ではチャレンジのある学びが大切となる。

(3) 特定の学力層内だけの学習指導ではなく、連続的でより上位の発展的な層への学力向上を意識することについて

三つの層は、決して固定的なものではなく、それぞれの段階での学習指導の充実とともに、さらに発展的な学力層を意識した図1のような学習指導の工夫が大切である。

学習・発達N曲線

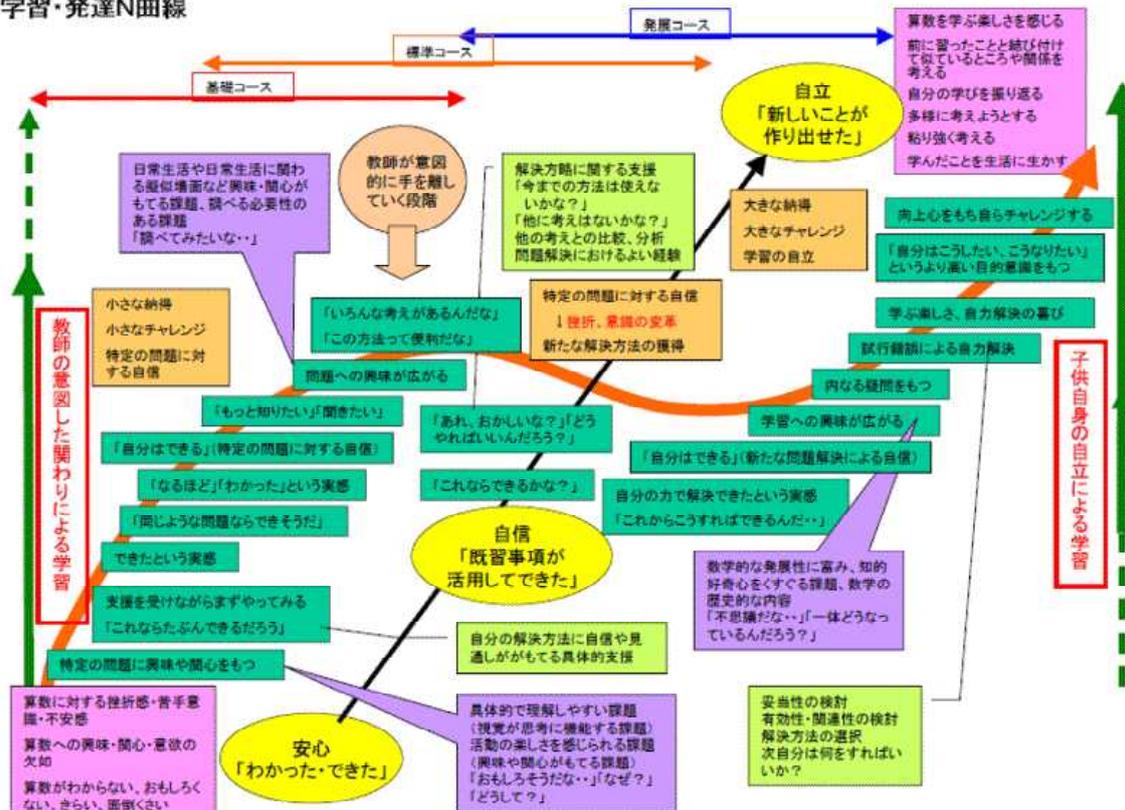


図1 学習・発達N曲線

(4) 学力向上を促すもう一人の自分（メタ認知）の育成を図ることについて

学力向上には教員の積極的な指導も大切であるが、むしろ、子ども自らが学びの意欲をもつためには、自分の知的活動（認知）ともう一人の自分（メタ認知）の連携による学びのプロセスの育成が大切である。例えば、「私は友達の考えを聞くとわかりやすい。」（学習の方略に関するメタ認知的知識）と意識している子どもには、学び合いの場面を積極的に設定することが必要である。

(5) 平成19年度と平成22年度との比較など、今後とも経年的な変化に注目することについて

昨年度の中学校調査は、平成19年度小学校調査を受けた児童が調査の対象であったことから、その結果を踏まえた問題が出題されたところ、中学校国語で「話し方の工夫をとらえることが引き続き課題」、中学校数学で「円の面積を求める際に円周の長さなどと混同している生徒が同程度いるという課題」が見られたという。中には小学校から引き続き課題が見られたものもあり、小・中学校を通じた継続的な指導が必要となろう。

#### (6) 学習指導の改善の検討では、具体的な事例にも着目することについて

昨年度は、学校での組織的な取組、さらには、教科の視点からの取組（小学校国語科、算数科）の視点からの学習指導の改善の検討が行われた。過去3年間の巨視的な取組に対して、昨年度は焦点化した微視的な取組の検討が行われたともいえる。

例えば、算数の割合の指導事例を踏まえて提言された指導改善は次のとおりであった。

- 学習の系統を理解する
- 数量についての子どもの感覚を豊かにする
- テープ図を使っての構造的な関係を考えさせる
- 自分の考えを説明させる
- 日常などでの活用との関係の理解を図る
- 結果に至る子どもの学習プロセスを解答類型を参考に考えてみる

#### (7) 指導の課題解決に必要な情報を得るための行動について

学校、学級、教科等の指導の課題の解決になお必要な情報を得るために、次のような方法も考えられる。

- ・一人で書籍・雑誌などを読む
- ・ネットにアクセスして一人でe-learningをする
- ・一人で通信教育を受ける
- ・学校現場を離れて、長期間、大学等で勉強する
- ・他の教員の公開授業や研究発表会に参加する
- ・学会や研究会に参加する
- ・教育委員会や教育センターなどの講座に出席する
- ・大学などで行われる公開講座に参加する
- ・科学博物館や科学館の展示物を見に行く
- ・他の教員と本を読んだりして共同で研修する
- ・他の教員や一般の人などとネットを利用して研修する

### 3. 今年度の課題と対策

#### (1) 今年度の課題

今年度の学力向上実践研究推進協議会では、学びへの意欲を高める授業を中心に考えてきた。段階的に言えば、次のような課題が考えられた。

- ・市町村教育委員会などの地域でのネットワークとしての支え合う取組がまず必要となる。
- ・その上に立って、個々の学校が、それぞれ置かれている状況の違いを踏まえて、管理職の強いリーダーシップの基に組織的な取組が求められる。
- ・そして、それぞれの教職員の改善への提案を基にして、児童生徒が学びたいようになるような学習意欲を引き出す方策をどれほど多くできるかが問われてくる。
- ・もちろん、その方策がうまく機能するためには、家庭や地域の支持が必要であることは言うまでもない。

#### (2) 今年度の課題への取組のポイント

課題を解決するために、次のようなプロセスが必要となる。

- ・現状の地域や学校の課題や解決の方向性の意識を共有化する
- ・課題の改善のための新たな枠組みを検討する
- ・そして、改善の工夫を実践する
- ・改善の実感を感じる
- ・改善の取組が習慣となる

例えば、平成19年の大阪府教育センターの学習意欲を高める授業の展開では、次のような枠組みが示されている。

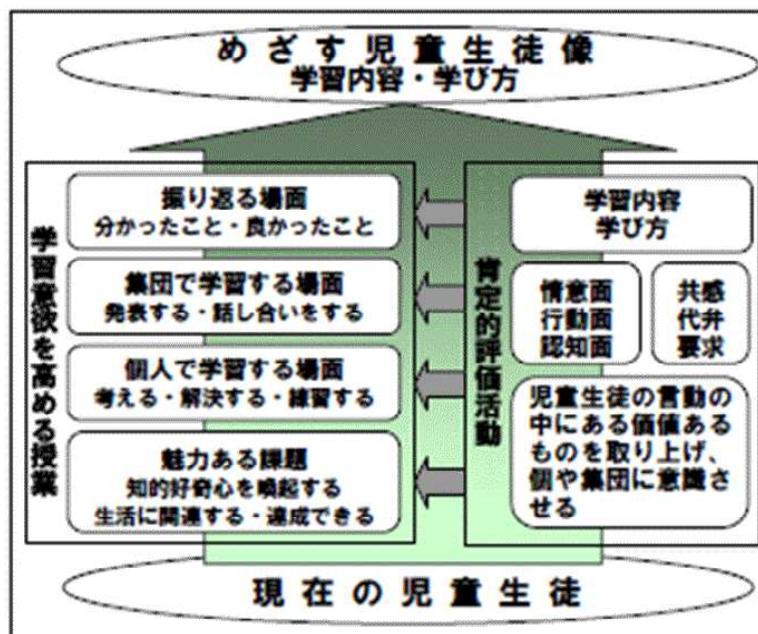


図2 「学ぶ意欲」を高める授業モデル

これをもう少し具体的な展開として提案されたものが、昨年度の奈良教育大学の棚橋教授による学習改善のプロセスに見ることができる。

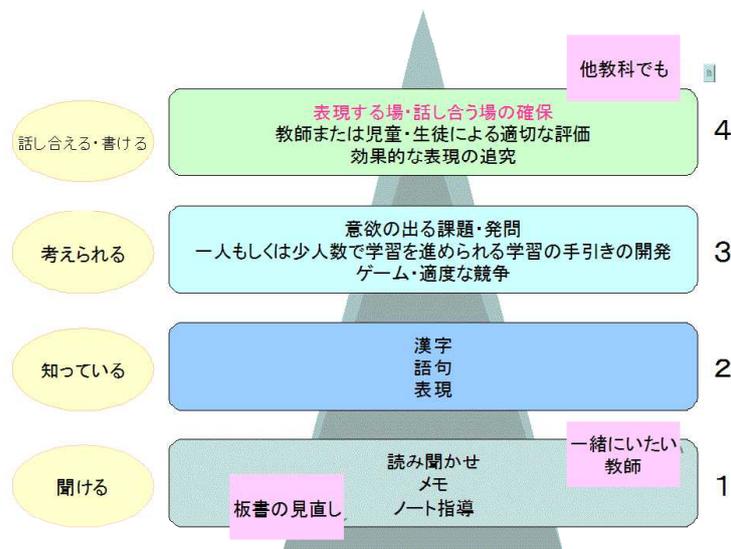


図3 国語などの学習ステップ

ここでは、国語を基本にして、学習の意欲を引き出すための授業の工夫の展開が具体的に示されている。

このような具体的な日々の授業での取組を参考に授業の改善を図りたい。

もちろん、個々の授業を学年ごとの微視的な視点で見ただけでなく、6年間や9年間の巨視的な系統的な視点で枠組みを考える必要がある。例えば、今年の提案では、田原本町立北小学校にみる6年間の〈書く力の育成〉の枠組みが参考になる。

5. 到達目標とつきたい力			
	学年	到達目標	つきたい力
低学年	1	順序を整理して、簡単な構成を考えて文章が書ける。	時間の経過に沿って経験したことを書くことができる。
	2	順序を整理して、簡単な構成を考えて文章が書ける。	経験したことを整理し、簡単な構成を考えて書くことができる。
中学年	3	相手や目的を意識し、段落相互の関係に注意して文章が書ける。	段落のまとまりを意識して書くことができる。
	4	相手や目的を意識し、段落相互の関係に注意して文章が書ける。	適切な接続詞を使い、段落と段落の続き方を考えて書くことができる。
高学年	5	相手や目的を意識し、文章全体の構成を考えて文章が書ける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>段落をはっきりさせ、段落相互の関係が分かるように構成を考えることができる。</li> <li>事象と感想、意見についてふさわしい書き方をすることができる。</li> </ul>
	6	相手や目的を意識し、文章全体の構成を考えて文章が書ける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>目的や意図を考えて、語句の選び方などを考えて書くことができる。</li> <li>表現の効果を工夫して書くことができる。</li> </ul>

図4 田原本町立北小学校の事例

このような6年間の展望があり、それぞれの取組の項目での具体的な実践事例も参考になる。もちろん、この6年間の計画が全ての学校に合うとは限らない。それが、すでに述べた個々の学校の置かれている状況の違いであるといえる。

それぞれの状況は、三つの層の段階的な改善のステップを意識して、より高位の学力向上を図ることが大切になる。

この点で、今一度、やはり昨年度の奈良県学力向上フォーラムで提案された奈良教育大学教職大学院の小柳教授のモデルを参考にして、学校としての改善の取組を図りたい。

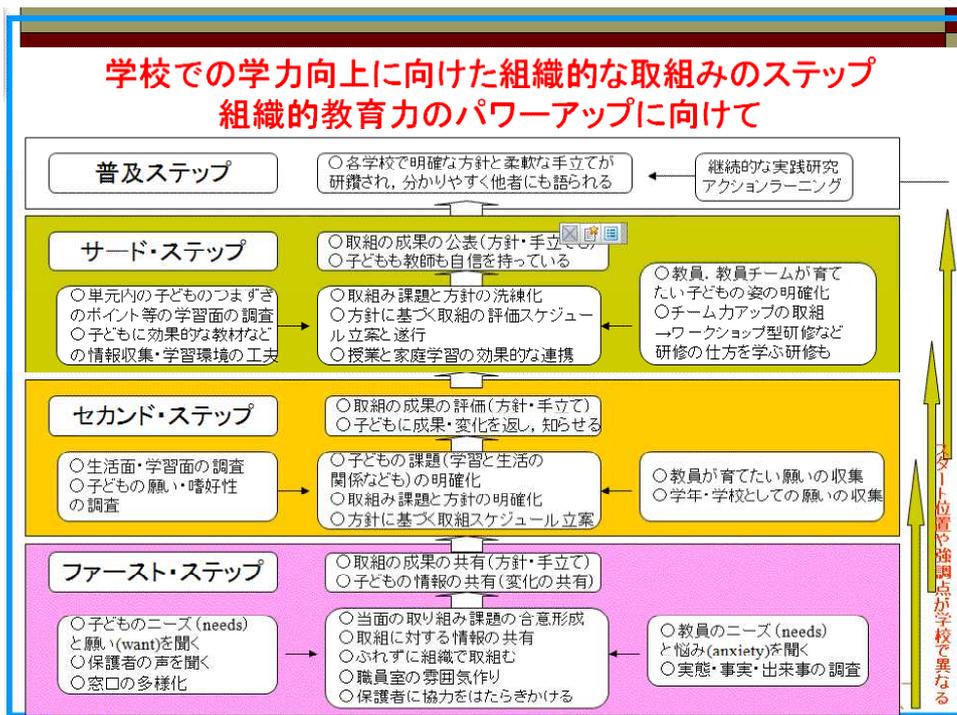


図5 学校での学力向上に向けた組織的な取組のステップ

このモデルの一部を具体的な実践の枠組みで示したのが名柄小学校の事例といえる。

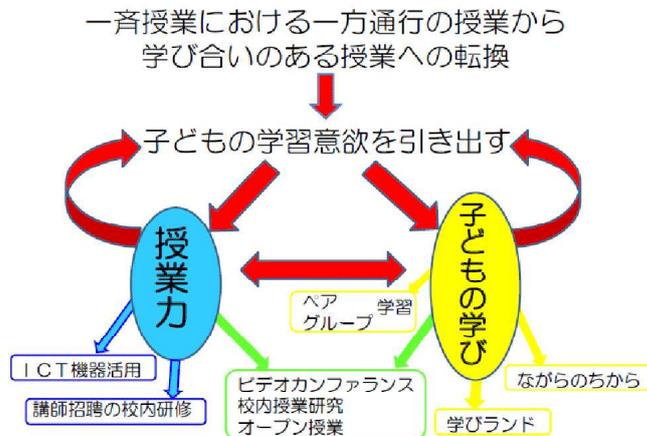


図6 御所市立名柄小学校での組織的な取組の枠組み

それぞれの取組についての解説は別の報告に譲るが、学校としての改善の取組としては是非参考にしてほしい。

#### 4. おわりに

今年度の学力向上実践研究推進協議会の取組を今一度まとめてみると、次のようになる。

- 地域としての取組がまず必要である。  
例 資料の共有、補充指導のプログラムの開発
- それぞれの学校にふさわしい取組と改善を行う。

改善を実践してから評価を考え、さらなる改善を図るのではなく、実践をする前に、あらかじめ評価と改善の枠組みを策定する。

例 付けたい力の学年達成表の開発

○個々の授業の改善を図る。

例 他者意識を育てるためのICT利用、小黒板利用、修正可能なファイルの工夫  
児童生徒の思考のプロセスの共有化の工夫

○教員の適切なアドバイスを工夫する。

○若手教員へのサポートを積極的に図る。

これを授業実践に限って考えてみて、次のような指標を基にした授業改善から始めてみてはどうだろうか。

授業中に以下のような取組を常に意識し、少なくとも学期に一度、アンケートや児童生徒のノートのチェック等で、授業の改善に対する子どもの実感を聴いてみる。

- ① 普段の授業で、児童生徒が自分の考えを発表する機会がよくあるか
- ② 普段の授業で、児童生徒が学級の友達との間で話し合う活動がよくあるか
- ③ 普段の授業で、児童生徒が自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることがよくあるか

このようにして、「どうしたら問題が解けるか」だけの指導から、「どうしたら楽しく問題を解くようになるか」への〈学びへの意欲を喚起する〉授業改善を図ってみたい。